

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 早津恵美子



学位申請者 中山 健一

論文名 日本語の動詞「いく」「くる」の多義の記述—本動詞から補助動詞へ—

【審査結果（博士論文審査の要旨）】

本論文は、日本語の「いく」「くる」について、本動詞・補助動詞それぞれの多義のありかたを解明するとともに、両者の中間的なタイプの存在を積極的に位置づけた研究である。約 7700 の実例の質的な分析にもとづくきわめて実証的な研究であるとともに、その背後に、単語の多義のありかた、語彙と文法の相関、単語の文法化、合成的な語から単純語への語彙化といった、理論面への意識のうかがえる、スケールの大きな論文である。「いく」「くる」については、日本語学において様々な研究の蓄積があるが、本論文のような豊富な実例にもとづく実証的な研究はなされておらず、本論文の価値は大きい。そしてなにより、上のような視野をもった理論的考察でもあることによって、本論文が「いく」「くる」の多義の記述にとどまらず、言語における語彙と文法の本質の追究にも貢献しうる論考になっていることが、独創的であり高く評価できる点である。

審査委員会は、論文審査と最終試験の結果にもとづき、審査委員全員一致で、学位申請者に対して、博士（学術）の学位を授与するのが適切であるという結論にいたった。

なお、審査委員会は、早津恵美子を主査とし、森山卓郎氏（京都教育大学教授、日本語文法論）、および本学の敦賀陽一郎教授、中澤英彦教授、川村大准教授の三氏を副査とする 5 名で構成された。

【論文の概要および概評】

本論文は、現代日本語（共通日本語）の多義的な動詞「いく」「くる」について、本動詞としての複雑な多義のありかたを解明するとともに、補助動詞（「走っていく・太ってくる」）としての多義性をも闡明し、さらに本動詞と補助動詞の中間的なタイプ（「買っていく・置いてくる」のように、「いく・くる」の意味の点では本動詞的であり、主動詞との結合の緊密さの点では補助動詞的であるもの）を、本動詞と補助動詞をつなぐものとして積極的に位置づけている。さまざまなジャンルの言語資料から採集した約 7700 の実例（「いく」：3075 例、「くる」：4618 例。同一のコーパス内に出現する両動詞の用例数の相違も注目すべき点）について、単に用例数の多寡をみるという量的な分析ではなく、ひとつひとつの用法を丁寧に観察していくという質的な分析が全用例について徹底的に貫かれた、きわめて精緻な実証的研究である。「いく」「くる」それぞれに 3 類の中心義をみとめ、派生義として 5 種 16 類を

みとめる。「いく」と「くる」はいわゆる「反対語」であるが、中心義の3類は相互に対応するものの、派生義においては「いく」「くる」の対応が必ずしも成り立たず、独自の派生をとげていることが明らかにされる。こういった多義のとりだしにあたっては、様々なレベルの言語的な形式——必須項あるいは副次項として共起する名詞や副詞の有無、それらの数と各々のカテゴリカルな意味、共起する語の文中での機能、語順、文中での「いく・くる」の形態、補助動詞の場合には主動詞のカテゴリカルな意味、など——の支えが重視されている。そのような方法論をとることによって、最終的に提案される多義の構造が説得的なものとなり、また、従来の研究では気づかれていなかった大小さまざまな興味深い性質が多く見出されている。

そしてまた、このような実証的な分析の背後には、言語学における一般的な問題としての、単語における意味派生の様相、単語の多義のありかた、語彙と文法の相関、単語の文法化、合成的な語から単純語への語彙化といった問題についての中山氏の関心の広さと理解の確かさが端々にうかがえ、それらを備えた実証的分析であることが本論文をスケールの大きなものとしている。

「いく」「くる」については、日本語学において、とくに補助動詞としての多義性、および、本動詞から補助動詞へのいわゆる文法化の現象について、様々な研究がなされてきた。しかし、本論文のように、豊富な事例にもとづいて実証的な方法で多義性を明晰にするという研究は補助動詞についてもほとんどなされていない。また、本動詞としての「いく」「くる」については、きわめて基本的な動詞でありながら、大量の実例にもとづいて多義の構造を論じた研究は、実は皆無である。そういった点でも本論文の価値は大きい。そしてまた、本論文は、上述のような広い視野をもった理論的考察であることから、直接の分析対象としては、共通日本語という個別言語の、現代語という特定期の、しかも二つの動詞のみをとりあげた研究であるにもかかわらず、「いく」「くる」の多義の記述にとどまらず、論文全体として、言語における「語彙」と「文法」の本質の追究にも貢献しうる論考になっている。論述にさらなる精密さが望まれる点がなくはないが、実証的にも理論的にも本論文はきわめて高く評価できるものである。

【各章の内容】

本論文は、大きく4部からなり、全17章である。以下、各章の内容を簡単に述べる。

第1部 序論

第1章〔本研究の目的〕では、本研究は現代日本語の多義語「いく」「くる」の記述を主たる目的とすること、そして、この問題の考察を通して「文法化」「語彙化」の理論についても考え、語彙と文法の相関の一側面を明らかにすることも目的のひとつだとされる。

第2章〔先行研究の立場・方法論〕では、本研究が、実際の言語資料から採集した十分な数の事例にもとづき、意味を支える言語的な条件を常に求めつつ「妥当性」「信頼性」「客観性」を満たす分析をめざすものであることが述べられる。

第3章〔実例分析の方法〕 分析対象は、1945年以降に書かれた小説・随筆・ルポル

ターゲット、シナリオなどの書き言葉資料から収集した実例を主たる資料とし、必要に応じて、インターネットのウェブサイトなどから採集した資料も補助的に用いられる。

第4章〔本動詞「いく」「くる」の先行研究〕。大量の実例の分析によって「いく」「くる」の多義構造を記述した研究はない。関連する論考がいくつか紹介され、『大辞林』と『計算機用日本語基本動詞辞書 IPAL(basic verbs)』における「いく」「くる」の記述が整理される。問題点として、記述が客観性に欠けること、意味を実現する条件への配慮がないこと、中心義と派生義および派生義どうしの関係が明らかにされていないこと、「いく」「くる」相互の関係への配慮がないこと、などが指摘される。

第5章〔補助動詞「いく」「くる」の先行研究〕 補助動詞「いく」「くる」に大きく「空間的用法」と「アスペクト的用法」の二つをみとめる先行研究をまとめたうえで、それと異なるものとして、両者に「進展(性)」という意味をみとめる論考をあげ、批判的に検討される。「進展性」は本研究を貫く重要な概念のひとつであり、定義として「主体の何らかの変化という動きについて、その動きが、持続段階という局面にあり、その局面において、変化が漸次的にすすむことを表わすアスペクト的意味である」とする。

第6章〔本研究での「補助動詞」の捉え方〕 先行研究で「順次」「平行」を表わす補助動詞とされる「いく」「くる」(「パンを買っていく」「ドレスを着てくる」)は、その意味が本動詞の中心義と同一であって意味派生を起こしておらず、また、「Vして」とは別の動作を指し示していることから本動詞的である。しかし一方、「Vして」と「いく」「くる」の構文的な結びつきはきわめて強く、その点で補助動詞的である。このことから、「いく」「くる」は本動詞と補助動詞とに二分できるものではなく、両者の中間的なタイプを積極的にみとめるべきだという本論文の立場が示される。

第2部 「いく」「くる」の多義の記述

第7章〔本動詞「いく」「くる」の多義構造の記述〕では、「中心義」と「派生義」を分ける立場で多義の構造が検討される。まず、移動主体の空間的な移動を表わすものを中心義とし、人であるのが典型であるものの、その他の移動主体のタイプ、移動の目的の明示/非明示、直示的(deictic)な性質の有無、などの点で種々のバリエーションがあることが詳しく述べられる、また、場所格(出発格[カラ]、経過格[ヲ]・到着格[ニ/へ/マデ]、方向格[ノ方ニ/ニ向カッテ]など)との共起の仕方や頻度が「いく」と「くる」とで異なっていることが数量的に示され、この違いはそれぞれの派生義の発達のさせ方の違いに反映するという。次に、派生義について、移動主体や移動先を表わす名詞のカテゴリカルな意味、場所格との共起の特徴、手段・方法格との共起の有無、などをもとにして5種16類の意味をたてる。そして、中心義からの派生のあり方は、中心義の空間移動の「経路」すなわち「出発点→経過点→到着点」がどう捉えられているかによって、3つのタイプに分けられる。(i)「経路」全体が他の概念へと置き換えられるもの(「中級から上級にいく」「客からクリームがくる」)、(ii)経路のうち、出発点、経過点、到着点の一部が完全に捨象されるもの(「その方法でいこう」「準備が予定どおりいく」)、(iii)そもそも経路としては捉えられないもの(「東京に大地震がくる」「冷えからくる体調不良」)である。また、派生義のう

中には「いく」「くる」どちらかにしかない意味もあること、そして、両者の多義構造の本質的な違いは、「いく」は「事態の推移」、「くる」は「事態の発生・出現」を表わすことだとされる。

第8章〔本動詞と補助動詞との中間の「いく」「くる」〕では、第5章で規定した「本動詞と補助動詞の中間的なタイプ」について論じられる。「Vして」となる動詞に偏りがあること、単なる順次や平行の関係だけでなく理由や目的を表わす用法も発展させている（「店から命じられてきた」「先輩の所に助言を求めていく」）ことが明らかにされる。

第9章〔補助動詞「いく」「くる」の意味記述 ①空間移動を表す場合〕。この章から第13章にわたって、補助動詞としての「いく」「くる」の5種の多義が各章で論じられる。9章・10章での意味は「いく」「くる」共通に有するものであるのに対し、11章から13章での意味は、どちらか一方のみにみられるものである。

この9章では、主動詞（Vシテ）が主体の移動を表わすもの（「のぼっていく」「走ってくる」）について論じられる。この類では主動詞だけでなく補助動詞「いく」「くる」のほうも空間移動を表わすが、補助動詞のほうは、空間移動の意味に加えて次の二つの抽象的・文法的意味、(a)その移動が必ず一方向のものであること、(b)移動における、話し手との直示的な(deictic)関係、を付与するものであるのが特徴である。またこの章では、須田義治(1995)の「進展性」の捉え方に批判的な検討をくわえ、主動詞が移動動詞の場合の補助動詞「くる」には、たしかに萌芽としての「進展性」はみられるが、文法的な意味として完全に焼き付けられたものとはいえないとする。主動詞が移動動詞である場合の補助動詞「いく」「くる」のアスペクトの意味はこれまであまり議論されることのなかったものである。

第10章〔補助動詞「いく」「くる」の意味記述 ②「いく」「くる」共通の「時間への派生」〕では、「いく」「くる」とともにみられる「時間への派生」が検討される。二つの場合があり、ひとつは「時間的推移」（「時間がたっていく」「投票日が近づいてくる」）、いまひとつは「非テンズ的な時間的基準点の付与（「君ならじゅうぶんやっつけていけるよ」「20年間この町で生きてきた」）である。後者のタイプは、従来の研究では「継続」の意味を表わすとされてきたものだが、「彼のことを思い続けてきた」「これからも同じ生活を続けていく」において「継続」の意味は主動詞「思い続ける／続ける」が担っていると考えられ、補助動詞「いく」「くる」の意味を「継続」とするのは不十分であると批判する。

第11章〔補助動詞「いく」「くる」の意味記述 ③「くる」の表わす「事態の発生・出現」〕では、補助動詞「くる」だけがもつ「事態の発生・出現」と括られる意味が述べられる。ガ格名詞の表わすもの自身の発生・出現（「汗がでてくる」「疑問がわいてくる」「声が聞こえてくる」）と、ガ格名詞の表わすものにおける新たな状態の発生・出現（「かばんが汚れてきた」「体がポカポカしてくる」「私はいらいらしてきた」）とがあり、それぞれ主動詞となる動詞に違いがある。すなわち、前者は出現動詞か知覚動詞かがほとんどであり、後者は主体変化動詞や生理的・心理的な状態を表わす動詞がほとんどである。また、「進展性」を萌芽的に表わすものとそうでないものがあり、表わす場合は、「次第に／だんだん／～につれて」など副詞的要素によって意味が補強されることが多い。

第12章〔補助動詞「いく」「くる」の意味記述 ④「いく」の表わす「事態の推移」〕では、補助動詞「いく」だけがもつ「事態の推移」の意味がとりあげられる。「進展性」を表わすもの（「泥水を清水にかえていく」「作品を丁寧に作り上げていく」）と「多回的動作による数量の累加」（「章類を一枚一枚丁寧に読んでいく」「人々が順番に座っていく」）とがある。前者は、従来「変化の過程」と呼ばれているタイプだが、単なる過程ではなく「進展性」を、補助動詞「いく」に焼き付けられた意味として表わしているとする。後者は従来明確にはとりあげられていないものであり、多回的な動作によって、動作を受けた対象あるいは動作を行った主体の数量が、漸次的・累加的に増加することを表わす。この多回的な意味は、主動詞の語彙的な意味によってきまるのではなく、副詞（「一枚一枚/順番に/次々と」）や複文関係（「～するたびに～」）など文全体によって決まるのが特徴である。

第13章〔補助動詞「いく」「くる」の意味記述 ⑤人から人への働きかけの移動〕では、「友だちが夜中に電話をかけてきた」のような、「対人的な動作における、人から人への働きかけの移動」を表わす補助動詞「くる」が検討される。主動詞にはきわめて偏りがあり、言語活動（「言う、話しかける、要求する、注文をつける」）、物事の送付・授与（「送る、送りつける」）、物理的打撃（「襲いかかる、ぶつかる」）、態度（「つかかかると、微笑みかける」）などにほぼ限られる。そしてこの意味は、補助動詞「いく」には基本的にはないので、他者への物理的打撃を表わす動詞であるときにのみ可能になる（「敵になぐりかかっていく」）。

以上、9章から13章まで補助動詞としての多義性が論じられるが、議論の中では必要に応じて、本動詞としての多義性や構文的特徴との関係にも触れつつ論が展開されている。

第3部 「いく」「くる」と「文法化」・「語彙化」

第14章〔「文法化」とのかかわり〕では、「文法化（grammaticalization）」の考え方をうけて、補助動詞としての「いく」「くる」について文法化の度合いが考察される。Lehmann(1982)、Hopper & Traugott(1993)、工藤真由美(1995)、Comrie(1998)、大堀壽夫(2004)などのいう文法化の指標・基準を紹介したうえで、本論文としては「文法化は、通時的にも共時的にも、語彙項目から文法項目に、0か1か的に変わるものではなく、両カテゴリーの間には、様々な中間的段階が存在する。」という立場にたち、意味的・形態論的な観点から文法化の程度が検討される。そして、補助動詞「いく」「くる」は、典型的とは言えないものの「文法化」の現象とみなしてよいとする。ただし、次のような疑問も呈する。すなわち、そのようにみなすことは、「Vしてくる」「Vしていく」の一側面を捉えているに過ぎず、主動詞「Vして」の側からみると、本来もっていた文法的意味・機能の喪失に他ならないのだという。従来指摘されていないことであり興味深い。

第15章〔語彙化しつつある「Vしていく」「Vしてくる」〕では、「Vしてくる」「Vしていく」が意味的に1つの動詞になりつつある現象が、「語彙化（Lexicalization）」の理論を援用しつつ検討されている（「できれば契約までもっていきたい」「成果がついてくる」「基地が村にやってくる」「いよいよ出発の日がやってきた」）。

第4部 結論と残された課題

第16章〔結論〕では、本論文の結論として、「いく」「くる」の多義の体系について述べられる。本動詞における中心義から派生義への意味派生、本動詞から補助動詞への意味派生の原理が本論文の立場からまとめられる。また、「進展性」という意味が生まれる要因についても試論的に述べられる。

第17章〔残された課題〕では、大きく三つの点が、今後への課題として述べられている。すなわち、(1)言語資料を書き言葉に限ったため、話し言葉に特有の意味があるのか、あるとすればそれはどんなものかについて議論できなかつたこと、(2)補助動詞が抽象的な・文法的な意味を表わす場合について、他の文法形式との関係（とくに「アスペクト」、受け身文での「受影性」）が議論できず、文法体系のなかでの位置づけを検討できなかつたこと。(3)本動詞・補助動詞いずれについても、意味変化の通時的な実例分析ができなかつたこと、である。

【講評】

本論文の内容について、各審査委員から様々な評価がなされた。高く評価されたのは次の点である。先に【概評】で述べたことと重なる点もあるが簡単にまとめる。

- (1) 日本語学において、補助動詞としての「いく」「くる」の多義性、および、本動詞から補助動詞への文法化の現象については、様々な研究の蓄積があるが、本論文のように、豊富な実例にもとづいて実証的な方法で多義性を明晰にするという研究は、本動詞についても補助動詞についても、実はなされておらず、本論文の価値は大きい。
- (2) 約7700例の実例を丁寧に観察し、それをもとにした緻密で説得的な論が展開されている。そのなかで、従来の研究では気づかれていなかった多くの興味深い現象や問題点が明らかにされており、「いく」「くる」の研究を大きく前進させている。とくに、これまであまり明確でなかった「進展性」を、他の意味（「変化の過程」など）との関係ではっきりさせ位置づけ得たことは大きな貢献である。
- (3) 日本語学だけでなく一般言語学の理論的枠組も適切に取り入れられており、それらに支えられた実証研究になっている。
- (4) 本動詞における中心義から派生義への意味派生、本動詞から補助動詞への意味派生について、意味派生の一般的な傾向を考慮に入れながらも「いく」「くる」に独自の原理が追究され、それぞれの多義の体系を明晰に描くのにかなり成功している。
- (5) 本論文の成果は、日本語の「いく」「くる」だけでなく、他の言語（審査委員の専門分野であるロシア語、フランス語）の移動動詞の分析にも参考になるものである。また、移動動詞にかぎらず、単語の多義の構造の解明にも方法論的に資するところが大きい。

以上の点が高く評価された一方で、各委員から疑問点や再考すべき点が指摘された。

- (1) 分析にあたって実例を重視するのは大切なことではあるが、収集した用例が当該

の言語をどの程度代表しているのか、ほんとうに相似形であるのかは、必ずしも保証されない。適宜 作例を用いて、内省によって仮説を検証したり文の適否の判断について他者にチェックしてもらったりすることも必要である。

- (2) 大量のデータの分析にあたっては統計学的な手法も必要になるのではないか。
- (3) 「いく」「くる」を対象とすることの意義、本動詞としての分析と補助動詞としての分析を一括して行うことの意義、本動詞の分析と補助動詞の分析との関係が必ずしも明瞭に述べられていない。
- (4) 類義の他の形式（「～つつある」「～してまわる」など）との関係、「つれていかれる」と「つれられていく」の違いなどの分析も取り入れたほうがよい。
- (5) 論述の仕方という点で、本論文で新たに明らかにしえたこと、本論文の独創性（実証面でも理論面でも）がやや埋もれてしまっている。もっときわだつような書き方にすべきである。

【総合的な判断】

以上述べたように、本論文は、現代日本語の多義語「いく」「くる」について、本動詞・補助動詞それぞれの多義の構造を明らかにしようとしたものである。多くの実例の丁寧な観察にもとづく実証的な研究であるとともに、多義のあり方について理論的な面からも考察した独創的な研究である。不十分な点もなくはないが、「いく」「くる」はもちろん、多義語の研究一般にも大きく貢献しうる豊かな成果をあげた論文であることは審査委員全員のみとめるところである。各委員からの疑問や批判も、本論文の価値を認めたくえで、今後の発展に向けての建設的な意見という性質が強い。最終試験においては、論文のいくつかの不備について審査委員から指摘するとともに、審査委員と中山氏との間で学問的な議論を行うことができた。このことは本論文の学術的な高さゆえのことである。その中ではまた中山氏が本論文の不十分な点をきちんと自覚しており、修正していける力が十分に備わっていることも確かめられた。本論文をもとにさらなる飛躍が期待できるものと判断される。

学位請求論文の内容、最終試験における応答などから総合的に判断した結果、審査委員全員一致で、この研究が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。